

# 達成動機と親和動機が大規模な e ラーニング講義 における成績とドロップアウト時期に及ぼす影響

野寺 綾\*, 中村 信次\*\*, 佐藤 慎一\*\*\*, 山田 雅之\*

## The Influence of Achievement- and Affiliation-motives on Scores and Drop-outs in a Large Scale e-Learning Lecture

Aya NODERA\*, Shinji NAKAMURA\*\*, Shin-ichi SATO\*\*\*, Masayuki YAMADA\*

### 1. はじめに

近年のマルチメディア技術の進展と普及に伴い、e ラーニングを授業に導入する高等教育機関の数は、年々増加している<sup>(1)</sup>。e ラーニングは、ネットワークにつながる環境にありさえすれば、時間や場所に拘束されることなく繰り返し行えるという利点があり、学習者にとって利便性が高い学習スタイルである。

だが、各学習者の適性（性格や動機づけ、学習観などの個人特性）に応じて効果的な教授法は異なる、という適性処遇交互作用（aptitude treatment interaction: ATI）の観点からすれば、e ラーニングは、どの学習者にとっても均等に学習内容の理解を促す方法だとは考えにくい。e ラーニングでの学習は、一定期間継続することが難しく、したがってe ラーニング講義において修了率を確保することは困難だと言われる<sup>(2)</sup>。このような現状は、e ラーニングでの学習を苦手とする学生が、一定数存在することを示唆しており、こうした学生の特徴を事前に把握し、適切な支援を提供することは、多様な受講生が集まる大規模 e ラーニングを実施する場合、特に重要な課題となる。

本研究の目的は、大規模講義で e ラーニングを実施し、どのような適性を持つ学習者が、e ラーニングを継続しにくく、学習内容の理解が困難なのかを明らか

にすることである。この試みによって、各学生に対する効果的な学習支援のあり方を検討する。

本研究では、適性のなかでも特に「動機づけ」に着目することにした。動機づけは、「行動を一定の方向に向けて生起させ、持続させる心理学的過程」と定義されており<sup>(3)</sup>、学業成績や学習の継続を促すうえで、非常に重要な役割を担うと言われている<sup>(4)</sup>。動機づけは、状況に依存して変容するものだととらえることも可能だが、個人が持つ比較的安定した特性としてとらえることもできる<sup>(5)</sup>。だが、一口に動機づけと言っても、その種類は多く、いったいどのような動機づけが、e ラーニングにおける学習の継続や成績を促進、または阻害するのかについては、十分な検討がなされていない。

e ラーニングにおいて重要な役割を果たす動機づけとは、何だろうか。この問いに答えるためには、e ラーニングという学習環境の特徴を把握する必要がある。

対面形式の講義と比較してみると、e ラーニングには、①自学自習を求められる、②対人コミュニケーションの機会が少ない、という特徴がある。第一点目は、学習者自らが学習計画を立て、自己管理をしながら積極的に学習を進める必要があることを意味する。換言すれば、e ラーニングは、「自己調整学習」<sup>(4)</sup>と

\* 日本福祉大学教育デザイン研究室（Instructional Design Laboratory, Nihon Fukushi University）

\*\* 日本福祉大学子ども発達学部（Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University）

\*\*\* 日本福祉大学国際福祉開発学部（Faculty of International Welfare Development, Nihon Fukushi University）

受付日：2011年1月28日；再受付日：2011年3月15日；採録日：2011年3月30日